

栄光

説教・「私に従いなさい」	岸俊彦牧師……1
特集・キリスト者としての証し……2	
子どもの日・花の日報告……5	
説教・「あなたと共にいる神」	久保哲哉教師……6
納骨・合葬式報告……7	
長老のファイル……7	
牧師の書斎から……8	

説教

『私に従いなさい』

マタイによる福音書9章9節～13節

岸 俊彦

今年度の教会学校の年間テーマは、『イエスさまの弟子になろう』です。弟子は、イエスさまが教えてくださった一番大切な教えを守る人です。「神さまを愛し、人を愛する」(マタイ22・34～40)人がイエスさまの弟子です。

イエスさまの弟子は、ペトロとアンデレの兄弟をはじめ、12人いました。その中の一人がマタイです。マタイは、カファルナウムの収税所で働いていた徴税人でした。カファルナウムは大きな町でした。その町に入ったり出たりするとき、税金を払わなければなりませんでした。税金を払う場所が収税所です。そこで税金を集める仕事をする人が徴税人です。

この仕事はユダヤ人から嫌われ

ていました。ユダヤ人を支配していたローマ帝国の仕事だったからです。また税金の一部をごまかして自分のものとする徴税人がいたため、徴税人は嫌われていました。

収税所に座ったまま、誰からも話しかけられることもなく、自分から話しかけることもなく、マタイは税金を集めていました。嫌われていたから、誰かと話したり、一緒に食事したりすることはありませんでした。

ところが、イエスさまが収税所を通るとき、マタイをじつと見つめました。イエスさまには分かるのです。税金を集めるより、マタイにはもっとするべき仕事があります。みんなから嫌われているからこそ、マタイにしてほしい仕事

があります。嫌われている徴税人だからこそ、相手を嫌うのではなく、その人を愛するのです。「敵を愛しなさい」(マタイ5・44)とイエスさまは教えてくださいました。敵を愛したら、敵は自分の友になります。自分を嫌う人を愛したら、その人は驚くでしょう。

誰も声をかけないマタイに、イエスさまは「私に従いなさい」と声をかけてくださいました。マタイは立ち上がってイエスさまに従いました。「立ち上がる」ことを意味するギリシャ語は「復活する」ことを意味します。マタイはイエスさまの言葉に従って復活しました。新しい人生の始まりです。

だからお祝いです。イエスさまはもちろん、ペトロと弟子たち、ファリサイ派の人たちも集まりました。ファリサイ派の人たちは、一番熱心に神さまの教えを守っている」と誇っていた人たちです。そこに、イエスさまに従ったマタイをはじめとする徴税人も集まりました。神さまの教えに従わないとファリサイ派の人から嫌われていた罪人も集まりました。大勢の人たちが一緒に食事することは何

と楽しいことでしょう。

ところが、ファリサイ派の人たちが眩きました。そして弟子たちに言いました。「なぜイエスさまは、徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」(11節)。

ぐちぐち言う彼らにイエスさまが言われました。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である」(12節)。実は、病気でなくとも、「神さまを愛し、人を愛する」ことのできない私たちは病人です。欠けがあり、弱い私たちは病人です。ファリサイ派の人も徴税人も、罪人と呼ばれていた人も、私たちも、神さまとイエスさまの助けを必要とする病人です。

誰が正しい人で、誰が罪人だと区別することが問題なのです。お互いの間に色々な壁を立てるから、自由に話したり、共に仕事したり、食事したりできないのです。この壁を打ち破るために、ファリサイ派の人や弟子たちも、徴税人も罪人も、イエスさまは食事に招いてくださいました。一緒に集まって食事をし、話したら、私たちの間にある壁なんか忘れてしまいます。(子どもの日礼拝説教)

キリスト者としての証し



昨年の旧統一教会問題により、カルト宗教が注目されています。

このような時に、伝統的な宗教であるキリスト教に属する私たちは何を伝え、何を証しできるのでしょうか。

新興宗教と伝統宗教

大友太郎

カルト宗教という言葉を目にするとき、自分の脳裏に最初に浮かぶことは、初期キリスト教会は、当時のユダヤ教世界から見て、今の私たちが新興宗教（特にキリスト教系の）に向ける眼差しと同類のものが向けられていたのではということだと思います。たまたま、今世界の先進国の中で、キリスト教が主流の宗教であるがゆえに私たちのキリスト教は伝統的宗教とされ、新興宗教と区別するという意識があるのではと思うのです。もともと、無信仰の人が多くなってきた現在、宗教そのものがなんとなく怪しげなものとして、あるいは、歴史と伝統の中に作られた様式としてのみ存在するものとして受け取られるようになってきている一面があるかもしれません。

世間一般で考えられ、私たちがつい思ってしまう、「社会の規範に従うものが正義であり、社会の

秩序を肯定しないものは排除される」ということはいつの時代でも、どの社会でもあるのでしょうか（全く詳しくはないのですが、戦前の大本教や現在の中国での法輪功などが思い浮かびます）。しかし、政治に認められることがその宗教の正当性を支えるということとは違うと思うのです。では、何がカルトの問題なのか。昨今のカルト問題の一つは組織としての問題、つまり、神が一人ひとりに語りかける声を聞くことを目指すのではなく、組織が一人ひとりの思いを強制しようとするところにあるのでは、と考えています。

キリスト者として、どう社会と関わっていくのか、それは自分が神様の声を聞き求めながら生きていくということしかないでしょう。正しさは政治、社会からの評価ではなく、神様の評価、御言葉に聞くことにしかないのですから。わたし自身には正しさはない。ただキリストの受難と贖いによって救いの道に至るのです。

カルト宗教と 伝統的キリスト教信徒

順 大西

カルト宗教、それは1970年代から90年代の米国における常軌を逸した宗教集団絡みの事件（信者の集団自殺、籠城と銃撃戦）、日本では1970年代以降の統一教会の霊感商法、1995年のオウム真理教の地下鉄サリン事件、2006年に報道された摂理教祖によるセクハラ事件などで一般的に浸透してきた言葉です。このカルト宗教の最大の特徴は、宗教と実生活を調和的に両立できなくさせ、寄付を無制限に求めること、自分たち以外の他のグループは全て敵、教団に入らないものは敵といった強力な反社会性の2つです。これらカルト宗教は自らの教義を世に広め、信者を増やしていくという意味で、我々伝統的キリスト教信徒と共通の課題をもってします。この布教勧誘活動の担い手として大学生が格好のターゲット

トになっています。厳しい受験競争を生き抜いたあとの人生の目標設定に悩む彼らの心に生まれた空白感に、カルトの提供するプログラムが入り込むのです。

こういった状況の中、伝統的な宗教であるキリスト教に属する私たちに何ができるでしょうか。それは、たとえその活動規模が小さくとも、毎週の礼拝を絶やさず守ること、教会学校で正しく子どもたちに聖書の教えを通して使徒信条を教えることに尽きるのではないかと思います。普段の生活の中で、自身がクリスチャンであることを明かすと、キリスト教に興味を持ってくれる人々もいます。自身が信仰している姿、背中をいつでも明らかにしていること、これからもそうしていくことが大切なことなのではないでしょうか。現在の大人たちには子どもの頃キリスト教の教会学校に行っていた人も多くあり、キリスト教のイメージはとてもしっかりしています。今は在していると思います。力は小さく、取るに足りないものですが、祈ってそのような姿勢で毎日を過ごしていきたいと思えます。

「喜び・祈り・感謝」で証し

沢田寛子

私が勤めているエディトリアル・デザイン会社では、営業もやります。それぞれ興味のあることが違うので、連絡する相手、やり方も一人ひとりに任されています。会社のHPには仕事の事例に加え、「のんびりキリスト教」というページがあり、CS教師時代の自分自身の経験を書きました。ここには「イエス・キリストの系図」や「系図の手ぬぐい」などの商品も載せ、クリスチャンではない人もたくさん購入してくださっています。なので、近頃は営業のメールを送るとき、会社の紹介と共に、自分自身についても書いています。

いつでもそこに立ち返ることができそうです。羨ましいです」と言ってくれました。言われた時はとっても嬉しかったです。クリスチャンとしてのアイデンティティを持って自己紹介することが出来たからです。

文字や色、写真やイラストで、「伝える」ということを仕事にしていますが、それでも毎回言葉に出して「正しく伝える」ことの難しさも感じています。でも毎週日曜日の礼拝でたくさんのお言葉をいただき、その言葉に押し出されてまた一週間を始められることは大きな恵みです。

神様は全てのことを私たちに備えてくださっています。ありのままの私たちを愛してくださり、それでいいと言ってくださいます。だから私たちは「喜び・祈り・感謝」することが出来ます。目には見えないけれど大事なものの、大切なもの、そして確かに存在するものがあることも知っています。見えない神様を通して、本当に見えるべきならぬものが何なのかをこれからも伝えていけたらと思っています。

営業先に行くと、大切にしていることとして、「喜び・祈り・感謝」することなんですよね」という話もします。ある方は「自分が信条としていることを持っているのは強いですね、ぶれませんし、

問われている「宗教」の意義

尾藤美紗子

旧統一教会に関する問題の中で特に衝撃だったのが安倍元首相を襲撃した犯人はじめ「宗教2世」と呼ばれる人々の赤裸々な告白である。親の「信仰」、正確には「マインド・コントロール」により、子どもたちの行動は著しく制限され、結婚相手を自分で選ぶこともできず人生が決められてしまう。

憲法第20条で保障されている「宗教の自由」を奪われた「宗教2世」たちが旧統一教会以外にもいてこれまで声をあげられず生きてきたと知り、ショックを受けた。

こうした実態が明らかになり、旧統一教会を含め宗教全体を「恐ろしい」「嫌い」「関わりたくない」と思う人が増えてきたように思う。実際、私は道ですれ違った年配の女性が連れの方に「『宗教』は恐ろしいわ」と言ったのを聞いたことがある。そもそも文科省が旧統一教会を「キリスト教」系に

分類していること自体甚だ心外なのだが、伝統的宗教すら遠ざけようとする風潮に私は危機感を抱いている。

21世紀に入り社会は急激に変化、今の時代は「不確実性(VUCA)の時代」と呼ばれている。だがそんな時代だからこそ、本来「宗教」が持つ存在意義がより問われているのではないだろうか。

「キリスト教」という伝統的宗教が2千年以上の歴史を越え今も世界中に広まっているのはそこに「真理」という目には見えないけれど確実なものがあるからだ。「キリスト教」では神の救いは全ての者にあり、分け隔てなく主イエス・キリストを通して神の憐みを受けていると教えている。主イエス・キリストの十字架の受難により私たちの罪が赦され復活の主の再臨を待ち望むというメッセージを、カルト信者には勿論、多くの方々に伝えたい。そのために私たちクリスチャンは何ができるだろうか？ 私は礼拝に誘うことしか思いつかないが、カルト信者の方たちがいつか真の「キリスト教」に出会えるよう心から祈っている。

信仰を語る

原 良介

この時代、キリスト教を含む宗教が持つ意味は何か。キリスト教人口の減少や宗教間の対立、原理主義の台頭など、宗教を取り巻く問題は数多くある。以前、『いま世界の哲学者が考えていること』という哲学入門書を読んだ。AIや再生医療、環境問題などの課題について、様々な哲学者の視点が紹介されており、「人類が宗教を捨てることはありえないのか」とのテーマで宗教も論じられていた。多様な宗教の共存や宗教と科学との関係につき、示唆に富む内容であった。しかし、宗教が向かう先については、欧米ではキリスト教人口の減少が顕著だが、過去の定説に反して世界的には宗教が衰退するどころか隆盛しており、宗教と近代とのあいだの関係は複雑で単純には規定できない、何とも歯切れの悪い帰結であった。

ただ考えるに、神様のご計画は

人知を超えており、我々が推し量ること自体無理な話である。先が見通せないからこそ、いつの時代も御言葉に聴き、祈ることより始めるほかない。そして、信仰を継承するには、難しいことは考えずに、信仰を証しするべきである。

最近思うのは、求道者がキリストに出合うためには、良き仲介者として手本となる信仰者が必要だということ。特に、子どもたちにとっては仲介者の存在は重要である。教会学校の教師をしていて、子どもたちは純粹だからこそ、罪あるキリスト者の姿に幻滅し、躓く恐れがあると不安に思う。本来キリスト者は自分の罪を自認して教会で悔い改めるが、求道者にはともすれば開き直っているように見える。だからこそ、日頃から信仰者は自らの罪と信仰を口で告白し、語ることが求められる。目に見えない主を信じるからこそ、せめて目に見えづらい信仰は恐れずにはっきりと言いたい。そして、自分が良き仲介者となるためにも、多くの方の証し、信仰の原点に聴きたい。コロナ禍で休止中の全体祈祷会の再開が待ち遠しい。

子どもの日・花の日報告

コロナ禍以前と同様の、子どもの日・花の日の行事が遂に戻ってきました。子どもたちは9時に集まって、花かごを作り、大人との合同礼拝に備え、礼拝堂に花かごを並べます。花かご作りのご指導は志磨恭子姉。前日の花材買い出し、当日早朝の材料セットからご準備が始まっています。本年もありがとうございました。

合同礼拝は子どもたちにとって緊張の場です。慣れない礼拝進行の中で、知らない讃美歌もあり、大人たちの素晴らしい讃美の歌声に驚いたり。礼拝後の退場時は、自作の花かごを持って礼拝堂の真ん中を誇らしげに歩く子どもたちに、皆様が大きな拍手をくださり、教師の私まで嬉しくなりました。

礼拝後はいよいよ4年ぶりの、経堂駅と消防署への訪問です。作った花かごを贈り、日頃の感謝をお伝えします。そろって感謝の言葉が言えるようにリハーサルをしましたが、本番では私の長い教師生活でも一番と言える、大きな声

で心のこもった挨拶ができたと思います。消防署では消防車に乗せていただいたり、楽しい興奮の最中に、なんと緊急出動要請が入り、和やかな空気は一変。隊員の皆様は素早く装備を付け、サイレンとともに出動して行かれました。このように街や子どもたちの安全を守っておられる方々がいてくださることを一人ひとり心に刻んだことでしょう。

子どもたちの健やかな成長の上に、これからも沢山の方々の祈りと、主の導きがありますようにと祈ります。(石室裕一)

たのしかった花の日はいい

小学校3年 ほんけちおり

私は、5月14日の日曜日にしつてのとおり花の日はいいにさんかしました。れいはいどうにお花をかざるために生け花をしました。生け花は、かみさまがよろこぶようにいっしょうけんめいがんばりました。私のお花は、カラフルになるように色をとりあわせにしないで、できるだけ、同じ色がおくにあるようにしてみました。れいはいどうにお花をかざ

ると、いつもとちがつてとてもカラフルなれいはいどうになりました。た。

その後、きょうどうえきとしょうほうしよに日ごろのかんしやをつたえるため先生が作ったお花をわたしました。私は、お友だちといっしょにしょうほうしよにお花をあげました。えきいんさんもしょうほうしよさんもよろこんでくれて、私もうれしかったです。

子どもの日・花の日合同礼拝に参加して

ハウプト・ニコラス有人、

ハンナ真理子母、伊波由佳

長く寒かった冬が終わり花々が美しい季節となりました。久々に過ごす東京で私はこの季節が一番好きです。私が生まれ育った沖縄は、春と言っても関東地域ほど鮮やかに咲く花々を見たことがあります。

5歳になる娘ハンナを保育園に送るときはいつも慌ただしく急がしながら歩いていきましたが、最近娘が「お花きれいだね、お母さんはどの花が好き」と聞

いてくるので、私も花を見ると落ち着きを取り戻し、「そうだねこの黄色のビオラが好きだよ、ハンナが好きなのはどれ」と楽しい会話が生まれています。娘は花々を見ているだけでは物足りず、その花々を摘んでしまおうとするので、花壇の花はその家の人のもので摘んではいけないと教えています。そんな娘にとって今回の子どもの日・花の日合同礼拝での花かごづくりは大満足で、とても得意げに見えました。花の日礼拝から2週間経った今も花かごにはきれいに咲いている花もあり、新しい野の花が加えられた娘の花かごは部屋を和ませてくれます。日常の忙しさから少しゆとりをもたらししてくれた花々とこどもの日・花の日礼拝に参加できたことに感謝します。

説 教

『あなたと共にいる神』

出エジプト記3章1節～12節

聖学院中学校高等学校教諭 久保哲哉

モーセが成人した頃のことです。モーセは同胞のイスラエル人を迫害したエジプト人を殺害したことが原因で、ファラオから命を狙われ、エジプトから逃亡したという過去があります。それから時が経ち、モーセは神の山ホレブにおいて主なる神と出会いました。その時、主なる神は「こちらに近づいてはならない。履物を脱ぎなさい」(3・5)と語りました。この「履物を脱ぐ」という行為は、イスラエルでは特別な意味があります。「かつてイスラエルでは、買い戻しや権利の譲渡に関する一切のことを決定する際、当事者は自分の履物を脱ぎ、相手に渡す」(ルツ4・7)という決まりがあったためです。きつと、主なる神と出会うためには、自分自身のすべてを神に明け渡す必要があるということなのでしょう。

イスラエルの民をエジプトから導き出す」との使命を告げました。神からの使命が示された際に、モーセは「私は何者なのでしょう。私がイスラエルの人々を本当にエジプトから導き出すのですか」(3・11)と神に問いかけました。すると、主なる神は「私はあなたと共にいる。これが、私があなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたがたはこの山で神に仕えることになる」(3・12)と語りました。これは本当に興味深いことです。モーセの問いかけに対して直接「そうだ、あなたが導き出すのだ」と言うのではないのです。「私はあなたと共にいるから大丈夫だ」とイスラエル人を助け出すことを前提に、神はモーセの将来の姿・ビジョンをお語りになりました。

自分はい体何者なのか。自分是他者からどのように見られているのか。自己評価も他者からの評価も低く、自己を肯定できない私たちです。しかし、私たちは、厳しくも優しく語りかけてくださる神を信じています。神は私たちにも「私はあなたと共にいる。だから大丈夫」。それぞれの使命を成し遂げるその時まで、神が共にいて、守り、導いてくださいます。神から与えられた使命を全うした先で、あなたは必ず「神に仕える者になる」ことができるということです。

学校で聖書の授業を展開する際に「キリスト教の魅力」に触れることがあります。そのようなとき、「罪人を聖人にする。ここにキリスト教のすごさがあります。聖学院とは、聖人を養成するために建てられました。罪人が聖人になることができるのだから、皆も聖人になれます。神が共におられるから大丈夫です」と語っています。

人生を生き抜く上で、戦争あり、コロナあり、様々な苦難がありますが、神は私たちの苦しみをつぶさに見、私たちを救い出してください。過去、イスラエルの人々を救ったように、現在、将来に至るまで、神の愛は決して尽きることはありません。この神の愛は現在、主イエス・キリストの十字架に現れています。モーセが命をかけてイスラエルの民を救い出したように、私たちの主イエス・キリストは、全世界の全ての人々に救いの道をひらくため、十字架の死に至るまで従順に神に仕えられた結果、私たちは罪から解放され、聖霊の働きにより、聖なる道を進む力が与えられています。洗礼を受けた者は、罪をすべて神に明け渡した結果、すでに神の愛の支配の中につつまれているのです。

説教後に共に歌うために選んだ讚美歌21・463番の3節には次のようにあります。「荒海をも打ち開き、砂原にもマナをふらせ、主は御心、成し給わん。備え給う、主の道を。踏みて行かん、ひとすじに」

神によって定められた神と人との仕える道を進んでいきましょう。荒海をも打ち開く神が共におられるから大丈夫です。主は必ず御心を成してください。

納骨・合葬式報告

5月27日午前10時半より、生田の春秋苑にある教会墓地で、お二人の納骨と4体の合葬を行いました。教会墓地に集まって礼拝したのは4年振りのことです。今回は事前に、合葬の申し出のあったご遺族と、納骨後年数を経たご遺族40人に合葬のお願いと案内をしました。了解くださった方など34人の出席で行うことができました。

教会墓地が建てられたのは1981年のことです。前年、経堂北教会の開拓者、村田正亮牧師が逝去されたことがきっかけとなりました。その時墓誌は左側1基だけでした。2001年11月にカロートを増設し、合葬用のカロートも設けました。右側にも墓誌を1基増設しました。墓地の両サイドの墓誌両面には131人の方々の名前が刻まれ、一杯となりました。そのため今年2月に墓誌1対を正面に増設しました。

最初に合葬したのは2012年5月19日でした。村田牧師・ウラ夫妻、その次女愛子さんの夫・林直信さんの合葬でした。それか



(岸 俊彦)

ら、その年の10月27日が2回目、3回目が2016年8月27日、4回目が2018年9月8日でした。この日の合葬が5回目となりました。これまでの32体と4体の合葬で72体となりました。分骨が21体ですから、カロートには小さな骨壺が整然と並べられ、ずいぶんとスペースができました。夏のような日差しのもと、ご遺族の皆さんが、出席できなかった方々の分まで小さな骨壺に移す作業をしてくださいました。神の家族としての一体感を味わうことができました。天国も賑やかなら地上も賑やかです。主の恵みを分かち合うひとときとなりました。

長老のファイル

青葉の季節になりました。『栄光』が出る頃には梅雨入りも間近でしょう。畑もそろそろ夏野菜の収穫が始まります。植物の育ちにお日様と雨と大地の働きの大きさ、神様からの恵みを感じます。

教会総会を無事に開催できたことを感謝します。顔ぶれは変わりますが、新たな長老会として役割分担も決められ、新年度が本格始動です。今年度も牧師招聘に向けての重大な課題があり、話し合いを重ねて行くことになりました。どうぞお祈りお支えください。コロナが5類となったことから今年度の活動は少しずつ活発化しています。礼拝前のキリスト教入門講座をはじめ、5月のC.S.ピクニック(残念ながら雨天中止)、夏期キャンプも予定されています。コロナ対応については引き続きマスクを着用し、様子を見つつ継続的に検討します。しばらく教会から離れていた方々とも、笑顔で再会できることをお待ちしています。

5月21日には伊勢原教会の新井美穂先生から主の昇天とペンテコステの間の時期が教会誕生のために大切な準備期間であったこと、弱かった使徒たちが主から与えられた約束と使命を果たすための大切な祈りの時であったこと、何よりも神様からの無償の慈しみ、赦しが先にあることを篤く解き明かし頂き、信仰を新たにされました。

5月27日は4年ぶりの墓前礼拝でした。榎原温子さんと藤田ふさ子さんの納骨と40人の先達たちの合葬でした。太陽の眩しい日差しの中、40個もの骨壺が並ぶ様子は圧巻でした。主と彼らが私たちを集めてくださったから墓前に集って祈ることができた、信仰の絆を感じる時間でした。40個のお骨は一人ひとり小さな骨壺に移され、残り合葬用のカロートと一緒に収められました。教会が信仰によって結ばれた一つの家族なんだと実感しました。信仰の先達一人ひとりが信仰の証人として、主と共に天から私たちの歩みを見守り、応援して下さっている。励ましをいただき、恵みの時を過ごすことが出来ました。(小嶋幸子)

牧師の書齋から

5月30日、北区赤羽会館で第83回東京教区定期総会が開催されました。議員463人中310人の出席者でした。コロナ禍が下火になっただけと言われますが、当教会と同じく、いずれの教会もまだ用心しています。そのため教区総会を開催できる規模の教会を借りることができず、2年続いて公営の会場での開催となりました。総会特別委員や三役の立場で、

10年以上直接教区総会に関わってきました。今回は一議員としての出席となりました。準備、当日の運営、片付けからありがたいことに解放されました。それだけに総会に関わっている三役、議員のご苦労に感謝するとともに、できるだけ議事運営に一議員として協力したいと思いました。

教区常置委員の半数改選について、今回も総会前の有志による候補者推薦状について議論がありました。元議長と、前議長である私の名前による推薦状です。当教会

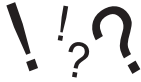
や西南支区で行われているように、倍数の参考候補を教区常置委員会で挙げるのが良いと個人的には考えています。諸事情から選挙方法について議論が行われていないため、教区総会再開以来30年以上有志による推薦状とお願いが出ています。出席議員の理解を得て、ほぼ推薦状通り常置委員が当選されます。分断化とか固定化と批判されますが、常置委員会に関わってきた者からすれば、現状はそうなっていないと思います。

選挙の結果、当教会の大友太郎

長老が常置委員に選出されました。永井清陽さん以来です。支区、教区、教会の橋渡しとなつてほしいと思います。

教区総会では教団機構改定の協議会が初めて行われました。3者の発題と協議、1時間半と限られた時間でしたが有意義でした。各教会の教勢、財政の逼迫と教団、教区は当然ですがリンクしています。教会のネットワークを維持し、折り、伝道を進めるために具体的に何ができるのか、本気で取り組まなければなりません。(岸 俊彦)

個人消息



掲示板



○聖霊降臨節第7主日礼拝
7月9日(日) 午前10:15
説教 中村謙一教師

○夏の集い
7月23日(日) 午前10:15～午後1:00
説教・講演 秋葉睦子宣教師

編集後記



▽今月の特集のテーマは当初「今、キリスト教に求められているもの」としていました。中々書きづらいテーマについて執筆していただいた皆様、ありがとうございました。(酒井)

「栄 光」2023年6月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧師：岸 俊彦
編集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp